

サビエル生誕五百年



巡礼の道

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

280

四体の木像(下)

新年を迎えて②

キリシタン大名として有名な大友宗麟が治めた国・豊後(今の大分県)の旧家の蔵で見つかったと言われる四体の木像を昨秋、知人

から譲り受けた。前回紹介したのはイエス・キリストと修道士の像、今回は聖母マリアと宣教師像を紹介する。

聖母マリアが冠を被っている。すべての聖母像が冠を被っているわけではないが、聖母マリアへの崇敬の念が強いカトリック教会の特徴の一つのあらわれだろう。

マルチン・ルターなどによる中世の宗教改



冠を被る聖母マリア像

革でカトリック教会から分裂して生まれたプロテスタントの教会はカトリックのような聖母マリアへの崇敬はほとんどない。これはカトリック教会のマリアに対する崇敬、信心がやや行き過ぎた時代の影響によるもので、一部のプロテスタントの人たちからカトリック教会を「マリア教」と揶揄(やゆ)されたりする。キリスト教は復活したイエス・キリストへの信仰が中心であるのは当然である。

ただ、イエス・キリストを産んだ母であり、同時に神とキリストに従う模範的な生き方を示した聖母マリアに特別な崇敬の念を持つことに、私は違和感はない。とにかく、この木像が聖母マリア像であることは疑う余地はない。

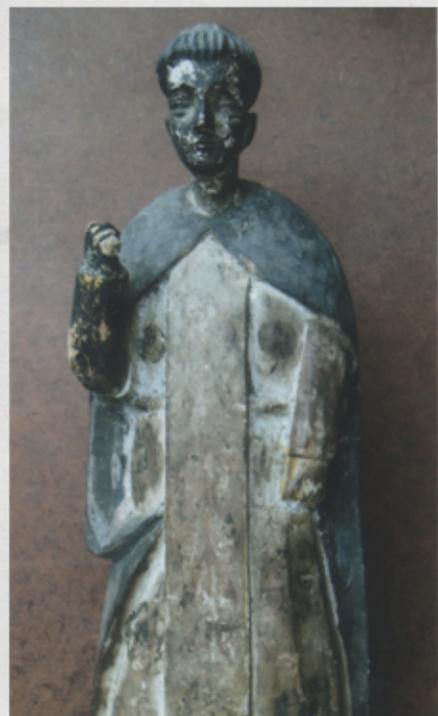
頭髪に特徴がある。頭の頂上部分の髪を剃った「トンスーラ」はカトリックの修道者の特徴だった。しかし一九六二年から三年間にわたって開催された第二バチカン公会議ごろからトンスーラの習慣はなくなり、一九七二年に公式に廃止されたので、現在のカトリック教会の司祭はしていない。

鉢巻き状に頭髪を残したトンスーラの髪型、そして司祭の式服をまとうこの木像は豊後で宣教活動の記録があるイエズス会かアウグスチノ会の司祭像と思われる。

これらの四体の古い木像がカトリック教会ゆかりのものであることは間違いないが、ただ、年代、出所についての証拠となるものは何もない。「別府周辺の旧家の蔵で見つかった」という言葉だけである。

この四体の木像を譲り受けるにあたり「キリシタン、迫害と殉教の記録(上・中・下)」「フリープレス社発行)を改めて読んでみた。

切支丹といえは長崎を思い浮かべる人が多いが、キリシタン大名、大友宗麟が治めた豊後の各地はキリスト教が普及し、信徒数は一万人を超えた。宗麟が死んだ一五八七年以降も新しい教会が建てられ、信徒数はさらに増えた。



トンスーラの特徴がある司祭像

しかし一六一四年、徳川幕府は禁教令を出し、激しい弾圧を始めた。現代では信じられない過酷な拷問で多くの殉教者が出た。記録によると豊後だけで一六六〇年から一六八二年までの間に五百七十七人が捕らえられ、それ以降、キリシタンは全く影を消したという。そんな中、四体の木像は隠されたまま存在し続けた。

間違いなくこれは信仰遺産として生き続けたのだと確信し、像を譲り受けた。そしてその時、新年最初の原稿にこのことを書こうと決めたのである。